

幼児期に於けるリトミックの基礎指導と 楽器遊びについて (その 1)

柿 本 因 子

はじめに

幼児期におけるリトミック教育の重要性については、今さらここに取り上げて述べる必要のないことである。このリトミック教育を取り入れた音楽の基礎指導において音・リズムを聴いてただ身体で反応し、訓練したにとどまらず、さらに発展・展開していくためには、基礎の段階から「音楽をする」いいかえれば楽器を演奏する、歌う等の演奏表現に結びつけていくことが大切なことになってくる。

このことから今回ここに、基礎の指導と演奏表現の中から特に、幼児の「楽器遊び」ということについて述べてみたいと思う。

〔I〕基礎と演奏表現について

演奏表現を幼児に行なわせるためには、基礎の指導が充分なされたのちに行なうことが望ましい。この基礎の指導とは何か、ということについて、ここに段階をおって述べてみたい。

1. 基礎と基礎指導について

幼児期における基礎の指導とは、幼児に、「リズム」「音」についての実感を持たせ、実音をともなった理解力を身につけさせることである。すなわち、基礎は、音楽的要素(リズム・旋律・和声)のあり方とか本質を知らせ、リズムとか音を素材に、身体反応したり、即興的に歌ったり、楽器を

演奏することによって、音に対する集中力・反応力・自動性・記憶力・想像力・創造力を高めることにねらいがある。このように基礎指導における基礎とは、音楽的要素についての法則や本質的なものを感じとらせ、理解させるだけでなく、幼児の能力の開発、諸感覚機能の発達にも、教育の目的・意義がある。要するにただ単に、聴音力・記憶力・読譜力を養うためのものではない。したがって、基礎指導が幼児の音楽教育の中で占める位置は、他のどの分野よりも重要であり、指導の中心をなすべき性格を持っているといえる。また、音楽の本質的なもの、法則的なものを感じた上での音楽的能力(聴音・読譜・記憶)でない限り、それらの能力は音楽的に無意味であり、「音楽する」「芸術を行なう」ということからかけ離れるということを銘記しなければならぬ。

次に基礎の指導方法について、具体的に述べると、

(1) 音楽反応

聞いたリズム・旋律・和音、などに身体的に反応する。

(2) 想像活動

幼児の日常生活の、言葉・遊び・物語・自然界の事物と現象をテーマに想像的に活動を展開し、模倣することから発展して、創造的に表現し、その意欲を高める。

(3) 音楽の演奏活動

歌うことも含め、楽器を演奏することを前述の音楽反応、想像活動に結びつけ、より幼児の生活に密着した幅広い視野の中での芸術的な経験を深めていく。

(4) 音楽的訓練（ソルフェージュ）

幼児期は音に対する感受性の最も強い年代である。この年代に音楽的訓練を始めることに意義があり、前述の想像的活動と、この訓練を合せて指導を展開することが望ましいし、効果的である。

(5) 音楽の鑑賞活動

幼児の音楽性は、良い音楽を聞き、それに直接反応し、反射的に身体的活動をするところから、鋭い感覚をもち、啓発され、高まるものである。したがって幼児だから粗雑な音楽でもよいというのは、間違った考え方であり、幼児だからこそ、旋律あるいは、和声の面からいっても美しい音楽が、幼児の日常生活、保育などの中で必要なのである。

次に、基礎においての音楽的内容についてつくわえると、前にも述べたように、音楽的要素、すなわち、リズム・旋律・和声、ということが出来る。この三つの音楽的要素は、それぞれが別々に存在するものではない。たとえば、リズムについて考えてみると、旋律とか和声の背景を同時に考慮しないで考えることは出来ないし、拍とか拍子の確立のためには、旋律・和声も大きな役目を持っている。このことから、音楽的要素は普通同時に融合して流れていく

ものであるといえる。この三つの要素に関する内容を別々に分類すると次のようになる。

(1) リズム

拍・拍子（2・3・4・6拍子）
速度・強弱・アクセント・リズム型
リズムフレーズ、リズムの組合せ

(2) 旋律

音の高低・音階（ハ・ト・ヘ長調と、その関係短調）
音型（tria, tettara, penteコードなど）
旋律フレーズ
終止形（半終止形・完全終止形）

(3) 和声

I・IV・V（ハ・ト・ヘ長調とその関係短調）

2. 基礎指導と身体表現

「リズム」とか「音」という抽象的なものについて、音楽的経験の少ない幼児には言葉で説明しても、そのあり方とか概念を把握させることは難かしく、理解させにくいことである。たとえば、「♪」の音符の名前は、四分音符であり、一と打ちである。「♪」の音符の名前は、二分音符であり、「♪」の音符の2倍の長さであり、二つのばす。というように、先生がいくら幼児に対して言葉で説明しても、その音符の時間的長さ、空間的变化を容易に理解させることは出来ない。また2拍子について、「2拍子とは強弱と、くり返されていくのですよ」と先生が言葉で説明しても、幼児は、その拍子での拍の問題、その拍が均等にしかも緊張から弛緩への動的変化をもち、周期的にくり返されていくなどということは、とうてい知ることは出来ないので

ある、ではどうすればよいか。

- (1) 幼児の日常生活に結びついた経験・遊び等の中から、模倣活動・想像活動を通して、リズム・音・経験させ感じとらせる。
- (2) 身体の諸感覚機能に訴える。このことは、歩行・手を打つ・聴く・見るというように、五感(聴覚・視覚・触覚)で直接にうけとめさせ、知的背景をもたせて行動させる。

以上のように、音楽を聞かせ、身体的に感じとらせ経験させることが、最も単的にその音楽そのものを感じとらせていく方法なのである。前述の2拍子についていうと、それは、2拍子の音楽を聞かせ、その拍子に合わせて歩行させ、身体的に感じとらせていくことになる。これと同様に、音符の長さ・音の高低・強弱の変化・速度の変化等の色々な場合にもあてはまる。

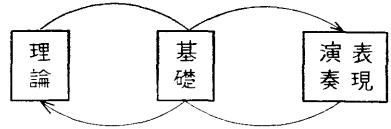
基礎指導における身体表現(身体反応)とは、抽象的なリズム・音を身体的な空間運動化することによって、より効果的にすることであり、そのあり方を理解させ、概念を持たせることなのである。

3. 基礎と演奏表現について

今まで、基礎と基礎の指導方法・内容、そして基礎の重要性について述べてきたが、ここでは基礎と演奏表現について述べてみよう。

基礎指導の段階において、リズム・音についての実感を持った幼児は、演奏することによって、実音をともなった理解力を持つことが出来る。いいかえれば、理論的なものを実音化し、リズムとか音を通して教育を感覚的に進めていき、演奏表現

に結びつける。又他方では、演奏表現から出発し、基礎的な教育を経て、それらの教材について音の実感、そして知的理解をもたせることによって、より発展な音楽的能力を蓄積していくようにすることである。これを図に示すと、下記ようになる。



このように、リズム・音、についての基礎的な指導の裏づけのない演奏表現は、発展性に乏しく、一つの教材についての事柄・内容を次の教材へ生かすことが難かしい。要するに、ただなんとなくある曲を歌い、楽器演奏したという空虚な指導となり、扱った教材について深く感じとり、理解する段階にはとうてい達することは出来ない。このように考えてみると、前にも述べたように基礎指導こそ音楽指導の大部分を占めるべく重要なものであるといえる。E・J・ダルクローズ博士の言葉にもあるように、「わたくしの指導のねらいは、学習の終りに、生徒たちが『わたくしは知っていますと』云うのではなく、『わたくしは感じとりました』と云えるようにさせることである」すなわち、『わたしは感じとりました』といえるようにするためには、幼児に音の実感を持たせ、感覚的に音の強弱・速度の変化・リズムの変化についての把握が出来るように指導し、演奏表現だけの指導にとどまらず基礎指導をふまえての教育が望ましいといえる。尚、基礎指導を充分受けた幼児は、音・リズムに対して敏感な聴音力・反応力等を身につけ、このような能力を身につけた幼児は演奏表現に対

して教師が指摘するまでもなく、その曲に対する内容を鋭敏に感じとることが出来るようになる。

〔Ⅱ〕『楽器あそび』について

ここでは、幼児に与える楽器について、また楽器演奏を指導する場合、幼児の『楽器あそび』をどのように取り扱ったらよいか、ということについて述べることにする。

(1) 幼児に与える楽器について

前にも述べたように、楽器を演奏することとは、楽器の演奏技術の訓練が目的ではなく、基礎教育がなされた後、又基礎教育の発展段階において取り扱われることが望ましいのである。このようなことから、数多くの楽器の種類の中で幼児に適している楽器を選ぶには、第一に、音楽的に優れた楽器、第二に音楽の基礎教育に適した楽器でなければならない。具体的にいうと、

- ① 幼児が容易に使えるもの。
- ② 音色の美しいもの。
- ③ 音を出すことが簡単なもの。
- ④ 調子が正しく、且く狂いの少ないもの。
- ⑤ 音高が固定しているもの。
- ⑥ 音域の広いもの。
- ⑦ 持ち運びの楽なもの。
- ⑧ 修理が簡単にできるもの。

以上のようなことを念頭において考えると、数多い楽器の中で、幼児用として使えるものは非常に少なく、大体打楽器（リズム楽器）と、ピアノ・オルガン等であろう。楽器名を上げると、

大太鼓・小太鼓・タンブリン・トライアングル・シンバル・カスタネット・拍子木魚・鈴・ウッドブロック・鉄琴・木琴・ハモニカ・ピアノ・アコーディオン・ピアノ・オルガン、等である。


(2) 『楽器あそび』の実際指導について


基礎指導の段階で、リズム・音を素材にして、これを身体的に移すことによって、音楽的要素が高まるということについて述べてきたが、さらに楽器を演奏するというのも、同様に音楽的要素を高めることに効果がある。そして、それと同時に楽器を演奏することによって、幼児に創造的な楽しさ、即興的な喜びを深めてやることも重要なねらいであることを、銘記しなければならぬ。


それでは、実際指導についての、指導方法、指導段階について述べてみよう。


1. 基礎リズムと『楽器あそび』について

- ① 指導の第一段階は、まず音楽に合わせて室内を自由に、歩行・馳足・ゆっくり・スキップ等を行う。この時前述したように、幼児の身近にあるものを模倣させる。

歩行 (うさぎ) 「

馳足 (リス) 「

ゆっくり (くま) 「

スキップ (小馬) 「

- うさぎ（歩行）を模倣しながら室内を先生のピアノに合わせて自由に歩行し、ピアノがとまったら室内の真中に置いてあるタンブリンの所へ走って行き、タンブリン

を打つ。そしてピアノを先生が弾きはじめたら、また室内を自由にうさぎになって歩行させる。この方法で、りす（カスタネット）、くま（大太鼓）、小馬（小太鼓）、と楽器を決めて次々に行なう。

② 音楽に合わせて、基礎リズムを手で打ったり、色々な楽器を持って打つ。

③ 音楽に合わせて歩行する。その時、先生は幼児に指示した楽器の方向へ、歩行するよう説明しておく。

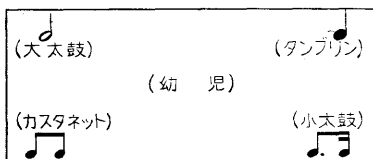
「♪」（くろ） タンブリン

「♪」（しろ） 大太鼓

「♪」（はた） カスタネット

「♪」（スキップ） 小太鼓

上記の楽器を先生は部屋の四隅に、図のようにしておく。



（この場合、最初は全部の楽器を置かずまず1つの楽器から、それが出来たら2つというふうに、楽器の数をふやして行くといよい）

教師がまず「♪」をピアノ（打楽器）で弾く。幼児は決められた楽器の方へ音楽に合わせて歩行する。楽器の所までいったら、タンブリンを歩行した速さで打つ。リズムが変わったら、次の楽器へと同様に行なう。このような方法で、基礎リズム（♪、

♪、♪、♪）を幼児全員に経験させ、楽器を打たせる。ただ一人特定の幼児が楽器を扱うのではなく、全員がいつ、どの楽器に行ってもすぐ打てるよう指導されることが望ましい。これになれてきたら基礎リズムを聴いたら、なるべく早く楽器の所へ走って行くというようにするのも良い。また、いつも全員で行なうのではなく、少人数にして行なわせるのも良い。この時それに参加していない幼児はその場でリズムを打たせるようにする。


この指導において先生が注意しなければならないことは、まず幼児に音符、又はリズムが楽器と結びついているかどうか、確認を忘れてはならない。たとえば、「タンブリン」どこに置いてありますか。「大太鼓」は、「小太鼓」は、「カスタネット」は、と幼児に楽器の置いてある方向を指させるとか、「♪（くろ）」だったら何の楽器を打つのですか、「♪（しろ）」だったら何の楽器を打つのかといったように、もう一度幼児にたずねてやることである。楽器に向かって歩行したり打ったりすることがスムーズになってきたら、先生は、音符から音符へ（リズムからリズム）へ移る時間を縮めて行く。いつも同じように、固定的、定型的な音楽を先生が幼児に聞かせていたのでは、無意味に覚えこむだけで、幼児の機敏性・反応力・反射性・集中力などの音楽性として必要欠くことのできない感覚機能を目覚めさせ、鋭敏なリズム感・音感が育たなくなり、時間と強弱の音楽の流れに即応し、適合していく感覚が育たなくなる。このことから先生がいつも即興的に音楽を幼


児に与えるよう注意しなければならない。

④ 先生に指示されたリズム楽器を打つ、

「」 大太鼓

「」 小太鼓

「」 タンブリン

「」 カスタネット

上記のようなリズムで各楽器を次々に打たせる。

先生 「 (くろ)」

幼児 

先生 「 (しろ)」

幼児 


先生 「」 (スキップ)


幼児 

(幼児のリズムに対する反応が上手になってきたら、短い間隔で合図をかける。)

。 楽器で「時計」あそび

ボンボン時計 ()大太鼓

カチカチ時計 ()タンブリン

テクタク時計 ()カスタネット

このように時計の種類にしたがって楽器を決める。先生はそれぞれの時計の音楽を適宜変えて弾く。幼児は自分の受け持ちの時計がでけると音楽に合わせて楽器を打つ。これを次

時 計 の 歌

溝上日出夫 作詞作曲

(楽 器 名)



ボン ボン カチ カチ カチ カチ 

(大太鼓) (タンブリン) (カスタネット)

ボン ボン い つ も や す ま ず う ご い て る と け い

(大太鼓) (楽器を持たない幼児が手で打つ)

い つ も や す ま ず お と が す る 

(カスタネット)

カチ カチ カチ カチ ボン ボン ボン

(タンブリン) (大太鼓)

に示す、「時計の歌」に合わせて行なわせる。尚、楽器を持たない幼児には、時計の振子にならせ、手を横にスイングさせる。ボンボンのは横に大きく振らせ、カチカチの時は普通に、チクタクの時は、小さく振らせる。これを歌いながら楽器と一緒に行なわせる。

- 先生がいろいろな基礎リズムを、ピアノ（打楽器）で弾く。幼児はそれをよく聞き自分の受け持ちの楽器を音楽に合わせて打つ。
- 以上のことが出来るようになったら、二つ以上の楽器を同時に呼ぶ。

先生 「タンブリンと小太鼓」



(このように二つの異ったリズムを同時に打たせるわけだから、自然に合奏となっている。)

- ⑤ 幼児の中から指揮者を一人決め、指揮者の指示に従って、決められたリズムで楽器を演奏する。(時には二つ以上の楽器を同時に指示させる。)



おもちゃのマーチ

小田島 樹人 作曲

大太鼓 $\frac{2}{4}$

タンブリン

カスタネット

小太鼓

- 指揮者は演奏させようとする楽器を指し、そのリズムを腕の動きで表現する。(拍子の表現はこの場合はしない。)尚、先生はこれに対して、ピアノで即興演奏をしてみることが望ましい。
- また教材を利用して次のように

行なわせるのも良い。
 例として「おもちゃのマーチ」を取り上げてみよう。
 楽譜で示したように、まず1フレーズずつ楽器をかえて、与えられたリズムを曲に合わせて打たせる。(前頁の楽譜を参照)

おもちゃのマーチ

小田島樹人 作曲

カスタネット
 タンブリン
 小太鼓
 大太鼓

カスタネット
 タンブリン
 小太鼓
 大太鼓

カスタネット
 タンブリン
 小太鼓
 大太鼓

カスタネット
 タンブリン
 小太鼓
 大太鼓

この時その他の幼児も楽器は打っていないが、歌を歌ったり手を打ったりして、いつでもすぐ楽器を打つことが出来るよう配慮されることが必要である。

- 以上のことがスムーズに出来るようになったら、前ページの楽譜に示すように行なう。

この楽譜の例は、一つの事例であって、先生自身が色々楽器の組み合わせを考えて幼児に与えてほしい。

また、この発展段階として、幼児に指揮をさせ、幼児自身に楽器の組み合わせを考えさせたり、即興的に楽器を加えたり、休ませたりすることが、出来るよう指導する。

尚、音符に対しての楽器の遊び方を示すと、次のような楽器を上げることが出来る。

- a. 「♪」に使用出来る楽器
大太鼓・シンバル・トライアングル・タンブリン等
- b. 「♪」に使用出来る楽器
小太鼓・タンブリン・カスタネット・拍子木・木魚・ウッドブロック・鈴・等
- c. 「♪♪」に使用出来る楽器
カスタネット・拍子木・木魚・鈴・ウッドブロック・小太鼓等
- d. 「♪♪」に使用出来る楽器
小太鼓・カスタネット・拍子木・木魚・ウッドブロック等

以上、基礎リズムと楽器あそびについて述べてきたが、これらを更に進めて、リズムの組み合わせと楽器あそび・リズムフレー

ズと楽器あそび・即興演奏へと発展させる。これについては、次回で述べることにする。

(講師)

参 考 文 献

「楽しい音楽の基礎指導Ⅰ・Ⅱ」

板野 平
溝上日出夫 共著
花村 光浩

全音楽譜出版社

「新しい幼児の音楽教育Ⅰ・Ⅱ」

板野 平 共著
溝上日出夫

全音楽譜出版社

「子供のためのリトミック」

小林 宗作 共著
板野 平

国立音楽大学

「リズム運動」

E・J・ダルクローズ 著
板野 平 訳

全音楽譜出版社

「幼児の楽器あそび」

酒田 富治 著
白 眉 社

「リズムのおけいこ」

野口善太郎 編著

全音楽譜出版社